

シュッディーナ・ラティーン少尉が起きたのは午前時であった。いつも午前時まで読書をして眠るのが習慣だったから、わずかに2時間に満たない睡眠であったが、軍人の常で彼はコンマ数秒で様々な事案を思い出し、また予想されるあらゆるものの対応を想起する。

「何かあったか」

「ウシユクヘイが率いる四〇万がこちらに向かって、いや、既に4個先の黒い森に集結し始めているとの情報が…」

驚愕して上半身を起こす。想定の中でも最も脳裡の倉庫の奥の片隅に小さく置いてあった想定だった。

「ばかな。なぜこのクレティブルゴに」

「そうです。確かに奴らはグワレア人の領土を略奪しながら横断し、軍の大駐屯地のあるザングガルトに向かっているはずでした」

「どう聞いていたぞ」

「どうやら蛮人なりに考えて探知機にかからないよう分散して進んできたようなのです」

「分散！ ばばばに、数人に分かれて来たと言っのか。考えられん。そんな危険なこと。そんなリスクを冒して来たというのか。そんなことができるものなのか」

「それが蛮族の蛮族たる所以なのでしょう。そもそもきちっとした体制がないのですから」

「どうしたらいいんだ。敵は弓と剣しか持たない蛮族で、此方はコンピュータ制御の火砲附装甲戦闘車輛やロケットミサイルや無線やレーダーで装備されているとは言え、わずか二分隊だぞ」

神聖シルヴィエ帝国赤軍に於いて2分隊とは五〇人の兵を意味した。ちなみに五つの班で一分隊である。すなわち一班は五人である。

「すぐにタルロット・スパシアーノ少尉に相談に行こう。太急ぎだ。すぐ支度をしろ」

「それには及びません。既に少尉はお出です」

巨漢のウシーリイ・イヴァノフ軍曹がそう応えると同時に、タルロット少尉が入って来る。

「聞いたとおりだ。我が分隊には戦闘の用意を支持した。作戦を立てよう。あまりに近附かせないことだ。奴らも戦車の怖さは十分知っている。夜陰に紛れて戦車に細工でもしないと限らない」

「戦車に見張りを立てよう」

「我が隊の一班を取り敢えず立たせた」

「了解した。ウシーリイ、ヴァルツ・シユルルワン曹長のところへ行って、当番の班以外の者たちを能起すように伝えてくれ」
「わかりました」

軍曹は彼の直属の上司の下へ帰った。

「さて、スパシアーノ少尉。どう戦おうか」

「まず状況だ。すべては現在の把握から始まる。哲学においても鉄則だ。素朴平明で強く現実的実践的な鉄則で、証明もい

らない事実だ。

さて、我が隊は開けた広い谷にいる。ヴァルグス川が背後にあり、川幅は二km、大河にして流れは比較的早く、水深も深い。この季節、水温は人間が堪え得るものではない。一応、いまスナイパーを二入配して、背後の襲撃を警戒させようとしているところだ。準備ができるまでは」

「準備？」

「敵は四km先に本隊を集めつつあるが、斥候を出しているはずだ。偵察警戒装置に反応はないから、いまのところ二km以内には達していない。しかし必ずや来るだろうし、偵察警戒装置をクリアする方法を見つけているかもしれない」

その装置は使い捨ての小さな探知機械を数十個あちこちに踏んで埋め、隊にある親機で鉄鎧を持った者を感知する装置だった。一個の機械が大凡二〇m内の金属に反応する。

「そして我々と言えば、身を隠す場所もなく、地形も優位ではなく、簡単に囲まれてしまう平地にいて、我々は通常の歩兵の戦闘方法ではすぐに殲滅してしまう。相手は四〇万なのだ」

「戦車に分乗して闘うか。奴らは完全モジュラー装甲した戦闘車輛を疵附けることすらできないはずだ」

「慢心するな。奴らだって考えもなく、無駄に死ぬ気はないはずだ。どんな者も見くびつてはならない。思い込みは常に破壊を呼ぶ。慢心は生きる資格のない者の証だ。なぜなら生き残れないから。野生の動物は慢心どころか、ポジティブ思考すらないと言っではないか。大丈夫とか、できるとか、心配ないとか考えた瞬間に、死ぬ」

「それも了解した。皆は捨てよう。戦車に全員分乗して尖形を作り、強行突破しよう。戦車の大砲だけでは近くの敵を撃退できない。付けられる火器はすべて附けよう。二〇mm口径の重機関銃を各車両に四つずつ、ロケット・ランチャーも設置しよう。何しろ、一台に二〇人も乗っているんだからな、無駄にはすまい」

「そうだな。で、向かう先は荒れた岩地や狭峻な渓谷は無理だから河を横断しよう。比較的流れの弱い、岩の少ない場所があったはずだ。幸い五台とも水陸両用の最新型でよかったな」

「よし。同じことを考えたな」

「士官学校で教わったとおりさ。一致しなければ、おかしい。さぼりの証拠だな」

「あり得ない。さぼりで試験が受かるか。我らが神聖帝国に於いてカンニングは死刑だしな。試験の不正に命を懸ける奴もいまい。そんなことをするくらいなら勉強した方が楽だ」

「さて作戦は決まった。支度をしよう。こちらも戦車を警戒させる。戦車こそ今回の要だからな。何だか楽しくなってきたな」

「ふふ」

かくして分隊は灯りを点けずに装備を身に着け、火器を設置し、必要な飲料や食糧を積んだ。すべて定位置に決まった順番で整理してあるので暗闇でも準備可能なのである。

「よし、そろったな。警戒にあたる班以外は速やかに乗り込め」

そのときだ。銃声。スナイパーが近附く敵を撃ったのだ。

「来たか。距離は」

「暗視装置の限界ギリギリです。二kmくらいです」

「そうか。偵察警戒装置に引つかからない距離だ。よし、おまえも乗り込め、さあ、警戒にあたる者たちも乗り込め」

火矢が飛んできた。十数本。そのすぐ後に数十本。

「何？ そんな ばかな」

「いや、そうでもないさ。どんなところにも工夫の余地があるものだ。敵を無知蒙昧な野蛮人だと想つのはやめる。学習しているのさ。さあ、乗り込もう」

「了解だ。理解したよ」

「さあ、少尉殿、全員配置に附きました。さあ、早くお乗りください」

ウーリイ・イヴァノフ軍曹が言つと、ラティーンとスパシアーノは乗り込んだ。

「出発っ！」

火砲附装甲戦闘車輛は岩の塙を踏み倒し、原野に出た。ラティーンは無線機の受話器を取る。

「既に囲まれている。取り敢えず数千人というところか」

スパシアーノも心える。

「武器は相変わらずだな。槍に太剣と楯と弓矢、毛皮の上に鉄の胸当て、脛当て、大角の附いた鉄兜、長い髪を靡かせる騎馬隊だ」

「また距離がある。落とし穴などのトラップを作る余裕はなかったと思っていだろうか」

「念のため、偵察警戒装置の範囲内で行こう」

バルドー・ヴォルド・ヴォールド軍曹が声を上げた。

「火矢だ」

探知機を見ていたノルド・マールスト等兵が言つ、

「よし。位置が分かりました」

アイシユヴ・アテルイ曹長が身を乗り出し、

「どれ。おお、これか。ふむ、目視の結果と探知機のデータが一致する」

レフ・ドルイド上等兵が考えながら、

「砲弾は各重二百発だ。四〇万に割り当てれば、千人に二発」

スパシアーノが顎を撫で、

「何とかなるだろう。よし、砲撃しよう」

ラティーンが無線に応える。

了解

大砲は五台の車輛から連射された。平原はたちまち火の海になる。
ヴァルツ・シュルルワン曹長が吠く。

「もつと燃やすか。どうせこっちは耐熱装甲もしているからな」

ラティーンも頷き、

「もう騎馬はパニックだ。前線部隊は事実上、瓦解だな」

しかしスバシアーンは飽くまで慎重だった。

「それほどでもない。こちらの探知機をリアルモードに変えた。いま五台で四〇発撃った。だいたい前線の半分が戦闘不能になったようだ。死亡及び重傷者千人くらいか。敵軍は遠巻きにこちらを囲み始めた。同時に突撃隊が七つの方向から接近し、約三百メートル地点まで来ている。重機関銃で一掃しよう」

了解だ。こちらのミサイルで森を撃つ。敵の本隊を崩そう」

シヤポ・ニュー・ザクセント一等兵

「地形確認が終わりました、ラティーン少尉。トラップはありません」

「むしろ、気を附けるとしたら、砲弾でできた半径二〇m深さ三mの穴の方だな。意外に、これで足を取られる間抜けな事例がある」

イングシュト・ヴォーン二等兵が、

「砲撃した位置は地図画面上に自動チャックされているから大丈夫です。ともかくも発見が早かったのが幸いしました。近代兵器も意外に原始的な手法に弱いですからね。落とし穴がないということだけで、我々にはかなり有利な状況です」

ラティーンは無縁でスバシアーンに言う、

「ああ、俺はもうすっかり楽しんでるよ。敵はもう数千の矢を放っているがこちらはびくともしない。じきに投石機が来るだろうが、そんなものではびくともしないぜ。しかもそれ以上の打撃力を持つ兵器が敵にはない。こんなに楽しいゲームはないね」

「森のミサイルは利いているな。一発で四千mを焦土化するからな。二発で凄まじい火事だ。恐らく大パニックだろう」

ノイヴ・ヴァウンティン二等兵が報告する。

「いま戦闘評価プログラムの中間の計算結果が出ました。戦闘開始から約八分、敵の戦闘能力は一〇万相当減で、約二〇万相当です」

アテルイ曹長が、

「重機関銃で数千騎斃した。見ろ、あれを。騎馬の大部隊だ。数万騎はいるぞ」
スバシアーン少尉は静かに応ずる。

「ええ、この地形のまま突っ込むぞ。強行突破だ」

了解

五台の戦車は△のかたちの陣形で数方の騎馬隊の群れを突き裂く。紅海を割るモーシエスのように。騎馬の胸や蹄や剣や槍や槍の穂先が戦車にあたる金音が怒涛のように鳴り響く。キャタピラに踏み潰されるぐしゃぐしゃという凄惨な音。重機関銃やロケット・ランチャーを放ち、次々薙ぎ倒す。ラマノフト・ピートルゼ二等兵が叫ぶ。

「ひゃっほお」

イシユタリアーノ・アマンダ二等兵も声と両手を上げ、

「突き抜けたぞ」

スパシアアーノが言う、

「敵は我々を囲んでいるが、それを焰で囲んで追い込んでやる。敵軍の外周を砲撃するんだ。しんがりを斃しながら、うまく焰で包囲するように、逃げ道は河しかない」

イリアノ・ウーノイ二等兵が眼を輝かせ、頷く。

「そうか、だが奴らは川を渡れない」

「そのとおり」

パルバーニ・ロドルゲ二等兵が笑いながら

「わくわくしてきたな」

「あゝ、そのとおりだ。撃て！」

ラティアーノも無縁で応える。

「そうさ、撃て、楽しいぞ。撃つんだ！」

十数の砲撃が半田の外周にあたるふちを成す軍の最後尾部隊に打ち込まれる。シユルルワン曹長が強く腕を組み

「むむ、うまくいったな、よし、河へ向かおう」

戦車は疾駆し、すぐに河べりに着く。「河だぜ、さあ、入るぞ」

激しく上下し、水しぶきを上げた。騎馬隊は岸で止まり、怒号する。

ヴォーニン二等兵が感嘆し、

「あゝ、痛快だ、敵は追って来られない。向こうで地団駄踏んでるぜ、そこ、あそこ連中は茫然自失だ、痛快だぜ！」

ヴォールド軍曹が戦車のライトが照らす方を指差し、

「見ろ、奴ら、いま頃になって自分らが焰に囲まれているのに気が附いたみたいだぞ。喚き、叫んでいる」

ヴァウンティン二等兵が、

「もう追い込まれて川岸に追い詰められている」

シユルルワン曹長は思わず手を打ち

「思った以上だ、うまくいけば、ほぼ全滅になるぞ」

グウェルムニー人はわずか数十人しか生き残らなかった。皆散り散りになってしまった。ラティーンとスパシアーンの対岸に涉つてからも砲撃をし、とどめを刺した。

スパシアーンが微笑む。

「大勝利だな」

ラティーンが気取った笑みを浮かべ、

「圧勝だ。ゲームの方が難しいくらいだな」

五〇人で四〇万人を倒した。歴史はそうように終わるはずであった。

北大陸（フルテ）東端の半島に住むグウェルムニー人の四つの部族を統合し、民族を束ねる大族長となった宇衆玖竈老禱（ウシユクヘイ・ローゼン）大王は神聖シルヴィエ帝国の支配から脱するため、西端の蛮族（グウェルムニー人よりさらに強靱凶暴な）フンヌ人の傭兵の力を借り、進軍したが、ほぼ壊滅の憂き目に遭った。この民族はシルヴィエの領土内に暮らす衆であり、法的には帝国の民とされ、多民族国家である帝国に数多い民族の中の二つの民族であったが、当然憤懣は年々積もる上にも積もり、遂に飽和状態となつて炸裂したものの、悲慘理不尽に碎け散ってしまったのである。

「大王は戦死した。必ず復讐せねばならない」

長髯族長である長髯大公飛龍武門（ヒゲムサシタウフリュウブモン）が無念でうに唸る。グウェルムニー人の末端の二であるこの山岳の民族はわずか17名しか生き残らなかった。副族長の失雨弗聖左衛門（シツウフツシヨウザエモン）も激しく吼える。

「敵はライフルやら重機関銃やらロケット・ランチャーなんかの火器を持つて装甲戦闘車輛に乗っている。暗視装置で夜もこちらが見えるし、軽重で頑丈なプロテクターで身を護り、探知機で常にこちらの位置を把握している。いまこにはないが、ジェット戦闘機だつてある。それに引き換え、我らは剣と槍と弓矢しかない。

しかし闘いは止めない。名誉と尊厳を守る闘いは不滅だ。宇宙が終わる日まで已む事はない。いや、我が魂魄は宇宙が絶えても二度ビッグバンを熾して敵を粉碎し、我が過酷なる神の前に血の滴るその生首を捧げるであらう」

彼らは誓い、血判状にその名を記し、血の印章を押した。ここに列す。

長髯大公飛龍武門 族長 チョウゼンタイコウヒリュウブモン

失雨弗聖左衛門 副長 シツウブツシヨウザエモン

睿智明察無尽斎 槍騎兵長 エイチメイサツムジンサイ

無限一切森羅万象 槍騎兵 ムゲンイチツサイシンランバンシヨウ

諸行無常右衛門 槍騎兵 ショギヨウムジヨウエモン

活殺自在禪阿吽 槍騎兵 カッサツジザイゼンアウン

荒城月影散櫻	弓騎兵長	コウジョウツキカゲチリザクラ
咒羅刹荼枳尼	弓騎兵	シュラセツダキニ
妖爛美姬朱蘭太良	弓騎兵	ヨウランビキシランタロウ
玲瓏漸紅孔雀爛漫	弓騎兵	レイロウザンベニクジャランマン
芥木疏牟尼	騎兵長	サイキソムニ
渺妄豪胆朝霧羣躰	騎兵	ビョウモウゴウタンチヨウウンライテイ
天下無双金剛杵	騎兵	テンカムソウコンゴウシヨ
瘳之爲暈乃	騎兵	イノイーノ
蒙昧暴濁流無明	騎兵	モウマイボウダクルムメイ
羅王馬古代大力	騎兵	ラウマコダイダイロキ
殺戮無情慘死	非	さつりくむじょうざんし